

**2014.8.20 広島大規模土砂災害
被災したアルバム・写真の保全活動
広島県立文書館**

2014年8月20日未明に広島で発生した大規模土砂災害は、死者74名、負傷者44名、損壊家屋430棟という、過去30年間で最大の人的被害を出す土砂災害となった。

広島県立文書館には、被災者が所有する写真アルバム22冊（写真プリント2,000枚以上）と日記などの記録類が、段ボール箱で5箱持ち込まれ、その後2か月にわたって保全活動を行うこととなった。

この活動については、当館の下向井祐子が2015年に発表した諸論文（『記録と史料』第25号、『広島県立文書館紀要』第13号、『アーカイブズ』57号の各誌に収録）で詳しく紹介しているので、参照していただきたい。

この被災アルバム・写真の保全活動は、文書館が行う活動としては当初から難しい側面を持っていた。それは、人員・時間・資材といった物理的側面だけでなく、そもそも「個人の所有物である写真の保全は本来業務ではない」との認識があったからである。

しかし、大規模災害という非常時において、史料保存の専門機関として何をなすべきか、文書館・アーキビストの使命とは何かを問いつつ作業を続けた結果、幅広い連携を得ることができ、被災者支援とアーカイブズの普及につながる有意義な活動を実現することがで

きた。また、この活動は県庁内でも評価され、毎月優れた行動事例を庁内で表彰する「ベストプラクティス」にも選ばれ、知事の表彰を受けた。

展示ポスターでは、「被災資料の受け入れ」→「史料ネットの応援」→「写真メーカーの協力」→「高校生ボランティアの協力」という作業の流れを紹介した。この流れが示すものは、「写真」という家族のアーカイブズを消失の危機から救い、大切に残し伝えるための活動の共有（立場の違いを越えた幅広い共有）である。とくに、写真の洗浄を通じて、若い世代がアーカイブズの大切さを考える機会を持つことができたことの意義は大きい。

当館では、この活動を通じて得た連携を、今後の文書館活動に活かすべく、大切にしていきたいと考えている。2015年2月の全国史料ネット研究交流集会で各地の史料ネットの人たちが一堂に会したが、その中で強く印象に残ったのは、史料ネットが活動の基礎としている「知り合っていること」という言葉である。日頃の付き合いはなくとも、ゆるやかにつながっていることが、いざという時には強い連携となって力を発揮する。そのような関係の大切さを今回のアルバム・写真の保全活動を通じて実感することができた。当館で作成した写真保全のリーフレットは、御協力をいただいた方々を通じて各方面で紹介されているようであり、また、当館が毎年開催する講習会では、今年度、初めて史料ネットの方々を招き、資料修復のワークショップを開催した。

被災写真の保全活動を通じて得た人と人との連携の輪を、今後の文書館活動の促進へとつなげていきたい。（西向宏介）